

卷末の言葉

「戦争が生み出す社会」シンポジウムを通して見えてきた今後の研究課題

阿部 潔

関西学院大学先端社会研究所所長

先端社会研究所では、2009年に「戦争が生み出す社会」というテーマ設定のもとで、二度にわたるシンポジウムを開催した。そこでの議論を通して、これから研究所での共同研究を通じて取り組むべき研究課題が見えてきたように思う。

「戦争が生み出す社会」を研究所の活動の中心に据えた背景として、しばしば考えられているのとは異なり、「戦争」は社会を破壊し秩序を崩壊させるだけでなく、それを通じてなにかしらの「社会」を生み出しているのではないかと、この問題意識があった。さらに、かつての非日常的な出来事である戦争を契機として作り上げられた社会のあり方は、現在の日常的な社会のあり方自体を大きく規定しているのではないかと。こうした「仮説」を出発点として、先端社会研究所における「戦争が生み出す社会」への学問的な取り組みは始められたのである。今こうして二回にわたるシンポジウムの記録を前にしてこの二年間の諸活動を振り返ると、当初想定されていた「仮説」が先端的な社会現象を探究するうえでの確かな視座となり得たことが改めて確認される。

第一回目のシンポジウムで取りあげられた東アジア地域における学問的な知の発展と戦争との深い繋がり、決して過去の出来事などではなく、今現在の私たちを取り巻く知のあり方に深く影を落としている。しかしながら、過去の戦争と学問との密接不可分な関係を明らかにすることの意義は、なにも学問知が持つ権力性や政治的支配の道具として学術調査が行われた事実を糾弾することに還元される訳ではない。かつて「大日本帝国」という時空間のもとで成立／発展した学問知のあり方を今現在の視点から問い直すことは、帝国崩壊後の戦後という時空間において自明視された「国民国家・日本」という枠組みに囚われた知のあり方自体を、ラディカルに問い直す契機を多分に含んでいる。そこにはきつと、単一と想定される国民＝民族からなる国家を所与の前提としがちな今現在の私たちが「当たり前」と看做している知の枠組みでは十分に捉え切れない諸現象を読み解くうえで必要不可欠な「新たな知」の可能性が潜んでいるに違いない。その意味で「戦争が生み出した」過去の知のあり方を研究することは、「戦争が生み出す」社会の帰結をより深く理解することへと繋がり、さらにはこれからの社会について考えるためのヒントを数多く与

えてくれるに違いない。

第二次世界大戦のように国と国との「交戦」として戦争が成立する場合、非日常的な戦争状態と日常的な非戦争状態とのあいだに境界線を引くことは、比較的容易である(例えば「終戦日」を境として戦前/戦後を区分できる)。だがそれとは対照的に、グローバル時代といわれる私たちが生きる21世紀の世界では、「戦争の世紀」と形容された20世紀と比較して、明確に軍事的な「戦争」は相対的に少なくなっている。だがそれと並行して、より多様な形態における「戦争状況」が遍在化しつつあることが指摘されている。そうした事態が引き起こす当然の帰結として、戦争=非日常/非戦争=日常という境界づけ自体の意味が失効していく。第二回目のシンポジウムで議論された「見えない敵」という今日的なテーマは、日常的なかに溶け込んだ戦争状況を言い表す言葉にはかならない。かつての「戦争」が生み出した社会のなかで私たちは暮らしていると同時に、実はそうした「戦争」それ自体も、決して現在でもなくなっていない。「戦争」はその姿を変えながら、人々の生と社会のあり方を大きく規定し続けているのだ。現在における戦争が生み出す社会の実態が「見えない敵」をめぐるシンポジウムでの議論を通して再認識された。

このように「戦争が生み出す社会」というテーマ設定のもとで、歴史軸を重視した分析と現状分析に主眼をおいたディスカッションの双方への取り組みができたことが、二回にわたるシンポジウムの大きな成果であったと考える。それを踏まえて、これから先端社会研究所として取り組むべき研究テーマと課題について考えてみたい。

かつての戦争が生み出した社会の延長線上に生きる現在の私たちは、同時に多様な形態において遍在化した現代的な戦争状況に晒されてもいる。しかし同時に、そこでは「他者」との関係性に根ざしたなにかしらの「社会」が成り立っていることも厳然たる事実である。もしもなんらの関係性も成立していなければ、人々が生きる世界は瞬く間に瓦解してしまうだろう。だとすれば、そうした「戦争状況」のなかで、他者との関わりをめぐるどのような作法が日々実践されているのだろうか。たとえさまざまな対立や抗争が遍在していたとしても、それが剥き出しの暴力に至らないのは、どのような社会的メカニズムが作動しているからなのだろうか。

こうした暴力と秩序をめぐる問いを「他者との共生」というテーマ設定のもとで探究することが可能であろう。しかもその際に、最近流行りの行政政策として推し進められている「多文化共生」という予定調和的なイメージを前提視するのではなく、これまで「戦争が生み出す社会」の研究を通じて明らかになった、さまざまに異なる「他者」同士が対立と緊張を内包しつつも同時に新たな「社会」を作り出していくダイナミズムに焦点を定めたい。今日の世界における「他者との共生」の条件と可能性について共同研究を進めることは、これからの先端社会研究所に託された使命だと考える。

他者との対立や抗争を前提としたうえで「共生」について研究する際には、当然のことながら「排除」の問題を避けて通ることはできない。予定調和的な共存ではなく、内的な緊張と矛盾に満ちたかたちで自己と他者が関わり合う空間こそが「社会」にほかならないと捉えるのであれば、そこにおける排除の問題は「社会の先端」を探究するうえで、本質的なテーマとなるに違いない。例えば、かつての戦争を介して「社会」が生み出された際に暴力的に排除された人々や集団は、戦後長い年月が経過した今になっても、引き続きさまざまな排除に晒されていることが少なくない。そうだとすれば、これからの時代に求められる「共生」のもとで、どのようにして排除の問題は取り扱われるべきなのだろうか。それぞれの社会・文化集団の多様性を失うことなく、より平等・対等な共生関係を促進するような制度や政策とは、具体的にどのようなものでありうるのだろうか。先端社会研究所がその重要な責務の一つとして、共同研究の成果を開かれたかたちでより多くの関係者に提供し、社会に広く還元することを掲げていることを踏まえるならば、関連する諸機関との連携と協同のもとで多様な文化・社会集団のあいだの共生の可能性と課題をめぐる実践課題に取り組むこともまた、これからの研究所が担っていくべき重要な課題であると言えよう。

「戦争が生み出す社会」シンポジウムを通じて、今日的な社会の先端的な問題が数多く浮かび上がってきた。それらを解明すべく各種の共同研究に取り組むことが、今後の先端社会研究所には期待されている。2009年に開催された二回のシンポジウムの真の意味での成果は、今後の研究所での諸活動がより自由闊達かつ内容豊かに展開されていくなかで示されるに違いない。